自分事としてとりくむ子どもの育成
－SDGs を通して－

1　研究のねらい

2　ねらいを達成するために

3　第１次実践について

4　第２次実践について

5　第２次実践後の子どもの変容

6　研究のまとめ

第２４分科会
総合学習と防災・減災教育
Ａ－２ものづくり・生活の中から

井口　晴渚　（名古屋・黒石小）

研 究 の 概 要 報 告

一、全体の感想

自己の生き方を見つめ直し、社会的・職業的自立にむけた力を育む実践、地域とかかわり、地域への愛着を深める実践、SDGs や環境、防災など今日的な課題を扱った実践が報告された。これらの実践においては、総合学習を核として学校や地域の特色をいかした教育課程を編成したり、子どもたちの興味・関心・思考の流れとその変化をとらえ、創意工夫をいかした教育活動を展開したりする実践者の真摯な姿勢が表出されていた。

二、討論の内容

⑴　子どもたちの興味・関心、思いや願いを取り入れた総合学習を展開するための工夫

地域学習やキャリア教育など、自己の生き方を見つめ直し、社会的・職業的自立にむけた力を育む実践が報告された。討論では、子どもたちの興味・関心、思いや願いをどのように育て、総合学習にいかしていくとよいかについて話し合われた。助言者からは、子どもが自己の学びを振り返る場面を適切に設定すること、相手意識や目的意識を明確にしながら学習を展開していくこと、授業や単元の見通しを教員と子どもとの間で共有することが効果的であるとの助言を得た。

⑵　主体的に探究したいという課題を見つけ出すための、探究課題との出会わせ方の工夫

SDGs や環境、防災といったテーマに関して、子どもが課題の解決に取り組む実践が報告された。討論では、子どもがこれらの探究課題を「自分事」としてとらえられるようにするための探究課題との出会わせ方について話し合われた。助言者からは、育成をめざす子どもの姿を明確にすること、SDGs の理念をいかして地域の課題を見つめ直したり地域や自己の理想を思い描いたりすること、地域や社会と直接かかわる中で、失敗や挫折をする場面も積極的に取り入れることなどが重要であるとの助言を得た。

⑶　総括討論

子どもたちが自らの生き方を考えられるようにするための総合学習の授業づくりのあり方について、各実践をまとめながら討論を深めた。実践者からは、自己肯定感や自己効力感を高めるために、達成感が得られる学習活動を構想することや、身近なおとなと積極的にかかわる活動を通して自己の将来や夢について深く考えることができるようにすることなどが重要であるといった意見が出された。助言者からは、実社会・実生活の事象から子どもたちが課題をとらえ解決する学習展開が有効であることや、地域や社会との直接的にかかわって学習することが重要であること、子どもたちの振り返りやそれを見取り支援する教員の適切な評価が大切であるなどの助言を得た。

三、今後に残された課題

⑴　小学校・中学校間における総合学習のカリキュラムの接続

⑵　総合学習を充実・発展させるための学校体制や学年体制の構築

⑶　総合学習によって育成を期待する力の明確化　　（加藤智・酒井智之）

報 告 書 の で き る ま で

全県で１５本のリポートが提出された。どの実践も子どもの実態を見つめ、学校の特色をいかした実践であった。県集会に提出されたリポートをもとに、研究成果がまとめられた。

助　　言　　者	加藤　智　（愛知淑徳大学）	酒井　智之（岡崎・竜海中）
教育課程研究委員	酒向洋一郎（一宮・浅井中小）	佐々木章仁（豊橋・五並中）
	大島　俊介（海部・（津島）東小）	小川　久之（名古屋・東山小）
	近藤　駿（名古屋・大森中）	渡邉　彰二（春日井・高森台小）
	赤塚　祐城（一宮・大和西小）	江崎　漠　（豊田・小原中部小）
	大河内　航（碧南・中央中）	

報告書の要点

本学級の子どもたちは、活動に前向きな反面、自分の課題をもたず、周りの意見に流されて活動することがあった。そのため、漠然と調べ、課題を解決するために必要な情報を集めることができない姿がみられた。そこで、SDGs をきっかけとして、世界を取り巻くさまざまな問題と自分たちの生活とのかかわりを知ることを通して、学校や地域の問題に自分事としてとりくむ子どもを育てたいと考え、本研究にとりくんだ。

自分事としてとりくむ子どもを育てるためには、①自分の課題を発見すること②集めた情報の中から課題解決に必要な情報を精選すること③活動を振り返り探究心を高めることの３つを達成することが必要だと考えた。それら３つを達成するために、それぞれ①専門家による SDGs の考えにふれる場の設定、②思考ツールを活用した情報の整理・分析、③他者からの評価をともなう振り返りの場の設定という３つのてだてを探究的な学習の流れに位置付けて２つの実践を行った。

第１次実践では、環境や食育に関する専門家を招き、興味をもった SDGs の目標について情報を集め、新聞にまとめた。実践を通して、自らの課題を発見したり、他者からの評価を得て達成感を味わったりしたことで、子どもたちは SDGs への興味・関心を高めることができた。しかし、子どもによっては SDGs そのものが難しいテーマであったため、課題が自分事にならず学びへの意欲が低下してしまい、探究心を高めるところまでは至らなかった。

そこで、第２次実践では、子どもたちにとって身近な教職員をゲストティーチャーに招いた。子どもたちは SDGs をより具体的な内容としてとらえることができ、自分たちにできることをすすんで考えるようになった。そして、学校全体にむけた SDGs 活動へと広げていった。実践がすすむにつれて、自ら課題を発見し、課題を自分事として解決にむけて夢中になって活動するようになった。

１　研究のねらい

４月当初、ある子どもから「SDGs を知っていますか？」と尋ねられた。ほかの子どもたちに SDGs のことを知っているか尋ねてみると、わたくしを含めほとんどの子どもが SDGs について知らなかった。その子どもは SDGs に興味をもっており、17 の目標をすべて暗記していた。そして「みんなに SDGs を知ってもらいたい」と、学級で SDGs の 17 の目標とマークを紹介した。すると子どもたちは「マークは見たことある」「地球が大変だ」と SDGs に興味をもち始め、理科や社会科でも「これも SDGs かな？」と話題になるほどであった。一人の子どもの発言をきっかけに、わたくしは SDGs には 17 の目標があることを知り、さまざまな目標に世界のみんなで自分事としてとりくむ姿が、わたくしのめざす子どもに似ていると感じた。

本学級の子どもの多くは、どのようなことにも前向きにとりくむことができる。グループ活動では、互いに助け合う姿もみられる。しかしその中で、自分の課題をもたず、周りの意見に流されて活動する子どもがいることに気付いた。また、漠然と調べ、課題を解決するために必要な情報を集めることができない姿もみられた。その結果、地図やリーフレットにまとめる活動においても、完成させることが目的となってしまい、探究心をもってとりくむ様子がみられず、寂しく感じた。

わたくしは、子どもたちには自ら課題をもち、自分事としていきいきと課題解決に向かってとりくんでほしいと願っている。そこで、SDGs というわたくしたち人間がとりくむべきさまざまな問題について学ぶことをきっかけとし、一人ひとりが自分の課題を発見し、学校や地域の問題に自分事としてとりくむ子どもを育てたいと考えた。

2　ねらいを達成するために

（1）研究の対象　黒石小学校４年生 37 名

てだてについて

自分事としてとりくむ子どもを育てるためには、①自分の課題を発見すること、②集めた情報の中から課題解決に必要な情報を精選すること、③活動を振り返り探究心を高めること、以上の３つを達成することができるてだてが必要であると考えた。

てだて①：専門家による SDGs の考えにふれる場の設定

課題を設定する場面で、SDGs の理念に関連するさまざまな専門家を招いて、出前授業を行う。専門家による SDGs の目標達成にむけた活動や考えに直接ふれることで、「自分もやってみたい」という思いが高まり、自分の課題を発見することができると考える。

てだて②：思考ツールを活用した情報の整理・分析

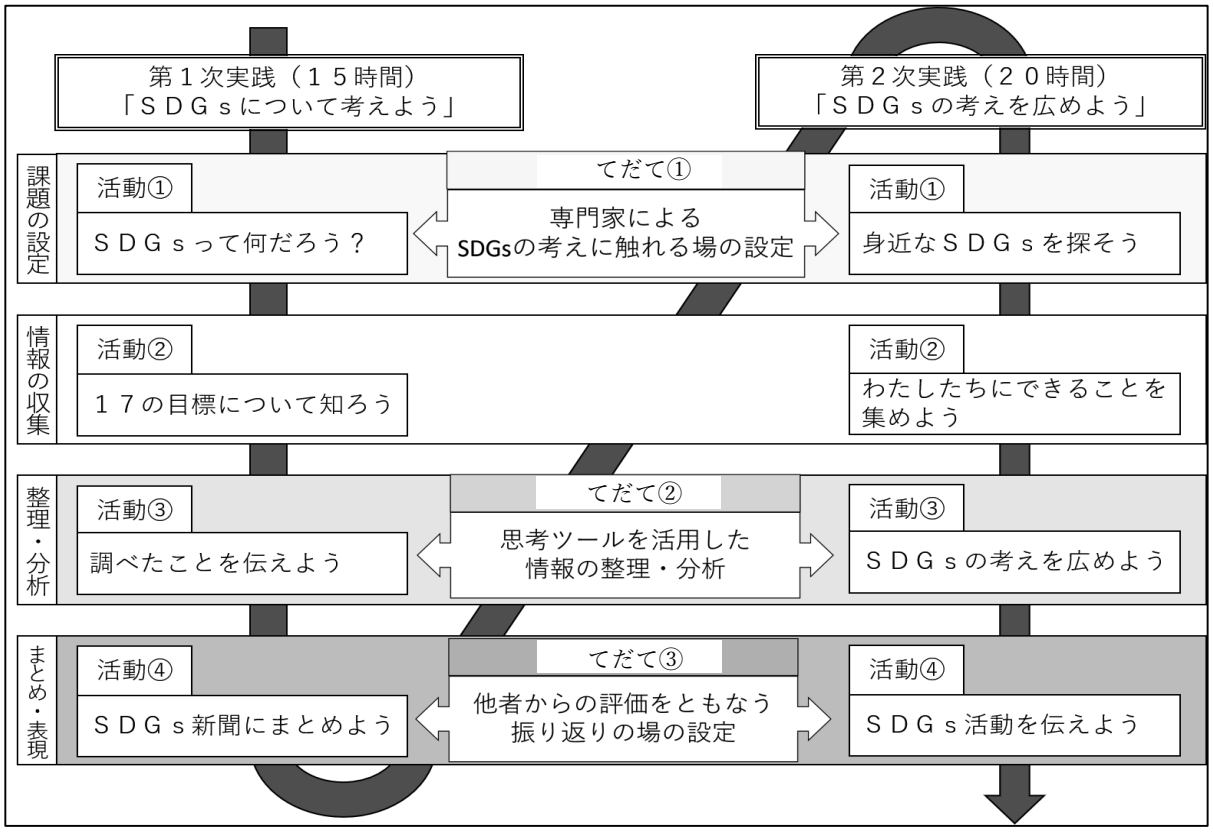
子どもたちが発見した自分の課題に合わせて集めた情報を整理・分析するため、思考ツールを活用する。思考ツールを活用することで、集めた情報を可視化でき、整理・分析しやすくなるため、課題解決に必要な情報を精選することができると考える。

てだて③：他者からの評価をともなう振り返りの場の設定

精選した情報をまとめ・表現の場面で、自分が伝えたい相手に発信した後、活動を振り返る。その際、情報を伝えた相手から、感想や意見などの評価をもらう場を設ける。他者からの評価をともなう振り返りを行うことで、「やってよかった」という達成感を味わったり、「次はもっとこうしたい」と次への課題が生まれたりするようになり、探究心を高めて、自分事としてとりくむ子どもが育つと考える。

（2）単元と実践計画

自分事としてとりくむようになるための３つのてだてについて、次のような探究的な学習の流れに位置付けた。



【実践計画図】

3　第１次実践について

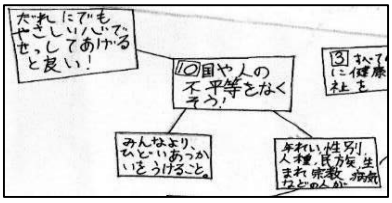
（1）第１次実践のてだてについて

てだて①：専門家による SDGs の考えにふれる場の設定

環境や食育にかかわる専門家を招いて出前授業を行う。気候変動や地域の自然、食育などの専門家の考えにふれることを通して、自分の課題を発見することができるようになると考える。

てだて②：思考ツールを活用した情報の整理・分析

発見した自分の課題と関連のある SDGs の目標について調べ、集めた情報をコンセプトマップ上にまとめる。その後、関連する情報を線でつなぎ、集めた情報の関係を可視化させることで、新聞に載せる記事が決めやすくなると考える。



【コンセプトマップ】

てだて③：他者からの評価をともなう振り返りの場の設定

完成した新聞を読み合った後、「はじめて知ったこと」や「共感したこと」を付箋紙に書いて、相手の新聞に貼る活動を取り入れる。他者からの評価を通して、達成感を味わったり、次への課題が生まれたりするようになり、探究心を高めることができると考える。

（2）第１次実践の様子

活動①　SDGs ってなんだろう？（課題の設定）てだて①

まず、子どもたちが他教科の授業や学校行事の中で興味をもっていたテーマについて出前授業を行うことにした。

理科「天気と気温」の学習で「教科書の気温より測ったときの気温の方が高い」「地球温暖化のせいかもしれない！」という話題があがったことをきっかけに、環境保護の専門家を招き、地球温暖化について学ぶ出前授業を行った。環境に関するクイズや手回し発電の体験を通して楽しみながら温暖化について学んだ。子どもたちは、「温暖化について詳しく知りたい」「二酸化炭素を減らさなきゃいけない」などの温暖化への興味・関心を高めていた。

社会科「ごみとわたしたち」の発展学習として、名古屋市のごみについて学ぶことができる出前授業を行った。まず、ごみの埋め立て処理場や大量のペットボトルを処理する工場で働く人の様子の動画を視聴した。そして、専門家からペットボトルのふたを手作業で分別していることを聞くと「こんなにたくさんのふたを人が分別するのは大変だ」「このままでは地球がごみだらけになるから、なんとかしないと」と発言し、自分の課題を発見していることが伝わってきた。

出前授業をきっかけに、「温暖化って気候変動の一つだよね」「プラスチックごみが増えると、海の生き物が守れない」など、発見した自分の課題と SDGs の 17 の目標を結び付けた発言が多くあがるようになった。そこで、「温暖化やごみの話は生き物にだけかかわるのかな」と問いかけると、「SDGs のいろいろな目標とかかわっていると思う」「どのような目標とかかわってるか調べたい」という意見があがったため、発見した自分の課題とかかわりのある 17 の目標について、情報の収集を行うことにした。

活動②　１７の目標について知ろう（情報の収集）

17 の目標について、子どもたちは本やインターネットを活用して情報を収集した。調べたことをワークシートにまとめていくと、「SDGs の目標どうしがつながっているから、調べる時間が足りない！」と、空いている時間を見つけて調べ学習を行う子どもが出てくるほど、夢中になって調べていった。そして、ワークシートが集めた情報でいっぱいになると、「なんだか SDGs に詳しくなってきた」と、満足そうにしている子どもの姿がみられるようになった。

活動③　調べたことを伝えよう（情報の整理・分析）てだて②

情報収集をしているうちに、子どもたちどうしで「どの目標を調べているの？」と自然と聞き合う様子がみられるようになった。同時期に、国語科の授業で新聞のつくり方を学習してい

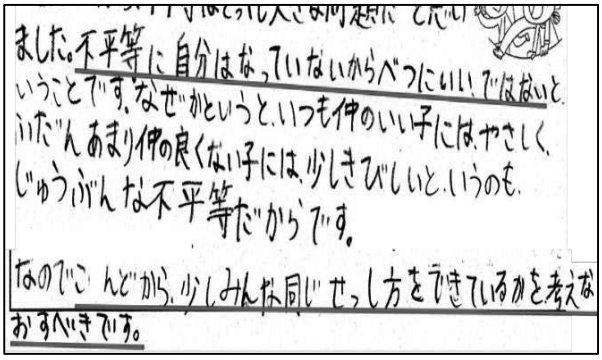
ると、「新聞をつくるならSDGs新聞がいい」と子どもから意見があがった。すると、それぞれの目標について新聞にまとめたいという意見が多かったため、集めた情報をもとに「SDGs 新聞」を一人１枚まとめることにした。しかし、情報収集をしていくたびに、集めた情報が膨大になり整理しきれない子どもがでてきた。そこで、相手により伝わる新聞をつくるために、集めた情報を整理・分析する活動を行った。

まず、集めた情報をコンセプトマップに示し、その中から記事にしたい事柄を選んだ。すると、SDGs の目標のうち、貧困、飢餓や福祉などの情報を多く集めていたある子どもは、コンセプトマップによって考えを整理・分析できるようになってきた。そして、テーマを「世界がいかに不平等か」と「平等とは、だれにでも優しい心で接すること」に設定して、記事を伝えることにした。

活動④　SDGs 新聞にまとめよう（まとめ・表現）てだて③

活動③で選んだ記事を新聞にまとめた。ある子どもは、マッピングで整理した情報から障がいのある子どもが世界に多くいることや、誰にでも優しい心をもって接してほしいという願いを、グラフや記事で表すことができた。

その後、完成した新聞を互いに読み合い、感想を付箋紙に書いて、新聞の裏に貼る活動を行った。子どもたちは付箋紙を通して他者からの評価をもらったことで、達成感を味わうことができた。また、友だちの感想から、「不平等に自分はなっていないからいいのではない。みんな同じ接し方をできているかを考え直すべきだ」という新たな課題が生まれていた。


ました。不平等に自分はなっていないからべつにいい、ではないと
いうことです。なぜかというと、いつも仲のいい子には、やさしく、
ふだん、あまり仲の良くない子には、少しきびしいと、いうのも、
じゅうぶんな不平等だからです。
なのでこんどから、少しみんな同じせっし方をできているかを考えな
おすべきです。

【振り返りカード】

（３）第１次実践の成果○と課題●

○　専門家から SDGs の考えにふれる場を設定したことで、「温暖化を止めたい」「ごみを減らしたい」など、自分の課題を発見することができた。

○　思考ツールを活用して情報を整理・分析したことで、「優しい心で誰にでも平等に」という思いに至った子どものように、必要な情報に精選することができた。

●　「温暖化」「飢餓」など、難しい内容があったため、発見した課題が自分事にならなかった子どもがいた。

●　まとめ・表現の場面で、一人で新聞にまとめることが難しく、意欲が低下してしまった子どもがいた。

（４）第２次実践にむけて

設定した課題が自分事にならず意欲が低下してしまったのは、てだて①の出前授業や専門家が、その子どもたちにとって身近ではなく、自分の課題を十分に発見できなかったためだと考える。また、まとめの場面では、自分の思いを十分に表出できず、意欲を持続することができなかった。そこで第２次実践では、子どもたちにとってより身近な専門家や事柄を選ぶことにした。

さらに、第２次実践では、同じような課題をもつ子どもどうしでグループをつくり、自分たちの思いが相手に伝わるようにするために、新聞以外の方法からも選ぶことができるようにした。

４　第２次実践について

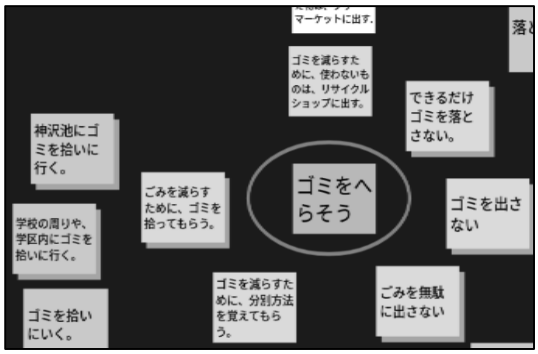
（１）第２次実践のてだてについて

てだて①：専門家による SDGs の考えにふれる場の設定

SDGs の目標を身近にとらえることができるよう、校内の教職員のように子どもたちにとってより身近な専門家を招いて出前授業を行うことにした。身近な専門家の話を通して、平等、食育や環境保全などについて、自分の課題をより具体的に発見できるようになると考える。

てだて②：思考ツールを活用した情報の整理・分析

第１次実践では、コンセプトマップを活用して情報の精選を行った。第２次実践では、タブレット端末の学習支援アプリの思考ツールを用いて、SDGs の考えをどう広めるかについて整理・分析する。学習支援アプリの思考ツールでは、画面上で集めた情報をカードにして、自由に移動したり取捨選択したりすることができる。また、学習支援アプリの中にある生徒間通信機能を使うことで、子どもどうしでカードを送り合うことができるため、紙を使って活動するよりも、速く簡単に情報の整理・分析がしやすくなる。



【思考ツール】

まず、発見した課題を中心に示し、周りに集めた情報を貼る。次に、似た情報を重ねたり近くに置いたりする。最後に、課題解決のための方法を外側に貼るようにする。このように順序立てて整理・分析することで、課題解決に必要な発信活動の方法へと情報を精選することができるようになると考える。

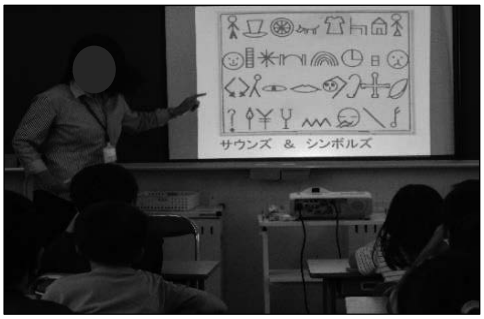
てだて③：他者からの評価をともなう振り返りの場の設定

学習支援アプリのアンケート機能を使って、発信したことが伝わったかどうか、他学年に調査する。他者からのアンケート評価によって「思いが伝わった」と達成感を味わったり、「よりよい方法があったのでは」と次への課題が生まれたりするようになり、探究心を高めることができるようになると考える。

（２）第２次実践の様子

活動①　身近な SDGs を探そう（課題の設定）てだて①

第１次実践を通して、人権や平等について興味をもっていた子どもから「６年生は、校長先生が道徳の授業をしてくれたって聞いたよ！いいなあ」という発言があった。それは、人権週間の特別授業として、校長が６年生にむけて人権講話をしていたことを、きょうだいから聞いていたのである。その子どもの発言を受けて、校長をゲストティーチャーに招いて、平等をテーマとしてパラリンピックの話や養護学校での体験談の話をしてもらうことにした。学校内の施設には、段差を減らしたり階段にてすりが付いたりするなど、子どもたちが使いやすくするための工夫があることを聞いた。子どもたちからは、「階段にてすりがついているのも、大切なことなんだ」「みんなが同じように楽しく学校に行けるといいね」と、学校内での平等に気付く発言が多くみられるようになった。また、「学校にもいろいろな人がいるから、学校ももっとみんなに平等になってほしい」と、平等に関する問題を身近にとらえる子どもの姿がみられた。



【校長による平等についての話】

また、本校の栄養教員は、本学級の子どもが１年生のころから毎年食育指導を行っており、子どもにとって身近な存在である。そこで、本年度の食育指導では、SDGs と給食が関連した授業をしていただいた。給食ができあがるまでには多くの人がかかわっていることや、つくっている人々の思いや願いについて話していただいた。授業の中で、１日に全校で出る給食の残飯量を聞くと、「１日でそんなにたくさん捨てられているなんてもったいない！食品ロスだ」と声が多くあがった。

【栄養教員の食育指導】

出前授業後には、「給食であんなに残量があるなんて食品ロスだ」「飢餓をなくすのに食品ロスはだめだ」などの感想がでてきた。出前授業の講師が身近な専門家だったことで、子どもたちは、より SDGs の問題を身近に感じ、自分事としてとらえ始めていることを感じた。また、活動後の振り返りと話し合いでは、「SDGs はこれからの未来にかかわる。もっとみんなに知ってもらわないといけない」という意見があがるようになった。そこで、SDGs の考えを校内に広める活動を行うことになった。

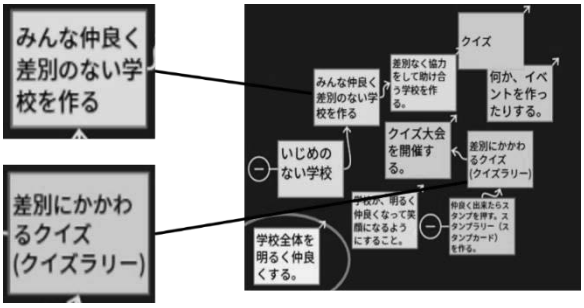
活動②　わたしたちにできることを集めよう（情報の収集）

課題を達成するために自分たちにできることを考え、ワークシートに書き出す活動を行った。身近でできる活動については、子ども用タブレット端末の中にある名古屋市独自の SDGs を学ぶことができるアプリや、インターネット、図書室の本などを使って情報を収集した。

活動③　SDGs の考えを広めよう（情報の整理・分析）てだて②

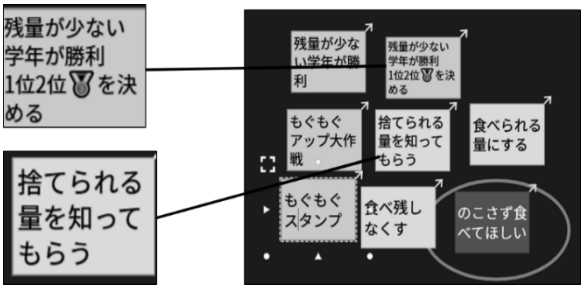
自分たちにできることについて、集めた情報を書き出した後、同じような課題をもつ子どもどうしでグループをつくり、課題を解決するために何ができるか話し合った。話し合いをする際、学習支援アプリの思考ツールを使って話し合うことにした。

「不平等をなくそう」という課題を発見したグループは、「平等の大切さを伝える」「全校で遊ぶ」など、互いに集めた情報を整理・分析し、「みんなに仲良くなってもらえるようにする」「差別やいじめをなくすことを呼びかける」という２つの情報を精選した。伝える方法についても同様にして話し合いをすすめ、世界の不平等についてのクイズラリーと、いじめをなくそうというポスターを掲示するという情報を精選することができた。



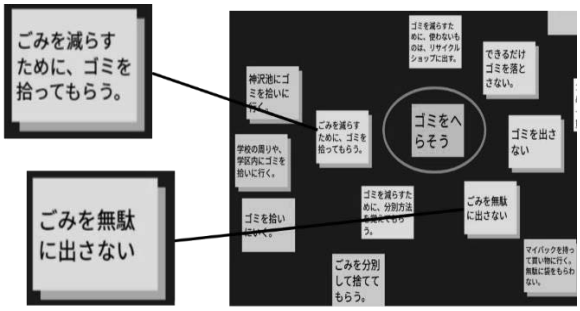
【不平等チームのマップ】

「食品ロスをなくそう」という課題を発見したグループは、栄養教員の話から「給食を残さず食べてほしい」という願いをもち、「食べられる量だけ作ってもらう」「捨てられている量を知ってもらう」などの集めた情報から思考ツールを使って精選した。そして、「残量調査を行って、残量が少なかった学級を発表する」と、残量調査を行うことにした。食品ロスチームは、栄養教員に協力をお願いし、発信活動にむけて意欲的に話し合いをすすめることができた。



【食品ロスチームのマップ】

「ごみを減らそう」という課題を発見したグループは、情報収集の活動では、「ごみを落とさない」や「マイバッグを持ち歩く」など、情報が多岐に渡っていた。その後、思考ツールを活用しながら話し合いをすすめ、互いに集めた情報を整理・分析した。その結果、「ごみを減らそう」という課題解決にむけて、「公園をきれいにすればごみが減る」と、ごみ拾いという情報を精選することができた。



【ごみ拾いチームのマップ】

活動④　SDGs 活動で伝えよう（まとめ・表現）てだて③

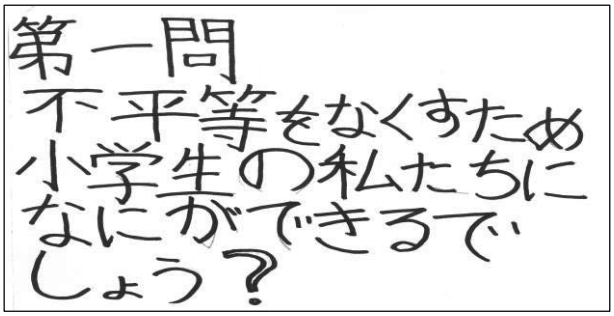
まとめ・表現の場では、それぞれ課題解決にむけて精選した情報をもとにして全校にむけて発信活動を行った。グループによって伝えたい相手や学年がちがっていたため、課題に合わせて低学年むけ、高学年むけなど、伝える相手もグループで決めることにした。また、伝えたい相手に合わせてポスターやクイズ、放送やイベントなど発信の仕方もグループで選択できるようにした。以下は、各グループの活動内容である。

課題	発信活動（まとめ・表現）	チーム名
不平等をなくそう	クイズラリー	助け合いチーム
食品ロスをなくそう	ポスター、残量調査	きがヒーロー
ごみを分別しよう	分別ゲーム	分別マスター
ごみを減らそう	公園のごみ拾い	ごみ拾いチーム
エコ工作	牛乳パック工作プレゼント	エコ工作
SDG s を知ってもらおう	スタンプラリー、かるたづくり	SDG s セブンティーン
自然を大切にしよう	ポスター、樹木マップ	自然大切
水を大切にしよう	ポスター	水は大切

【各グループの課題と発信活動の内容】

助け合いチームは、不平等をなくす大切さを知ってもらうために、世界の不平等に関するクイズやポスターをつくり、校内に掲示した。学校内で身近に感じられる不平等や不平等をなくすためにできることなどのクイズをつくり、その答えをポスターとして掲示した。それをクイズラリー形式にし、全問正解したチームを表彰することにした。「みんなが平等で仲良くなってほしいから楽しい気持ちになってほしい」という子どもの思いが、クイズラリーという工夫につながっていた。

【「不平等をなくそう」と呼びかけるポスター】



【不平等に関するクイズ】

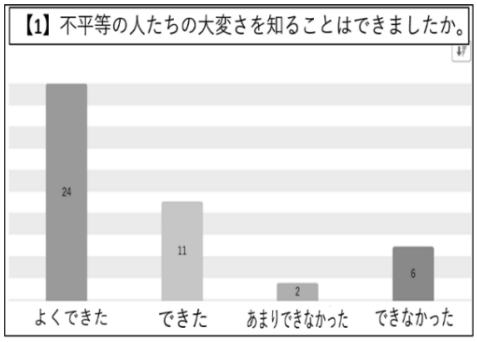
給食での食品ロスをなくすために、給食の残量調査を行うことにしたグループは、全校にむけて３日間の残量調査を行った。その後、３日間残量ゼロだった学級を校内放送で発表し、賞状を渡した。「きがヒーローチーム」の中には、第１次実践で飢餓について新聞にまとめた子どもがいた。新聞をまとめるときには、「書くのは難しいなあ」と発言し、意欲の低下がみられていたが、残量調査やポスターづくりでは、最後まで意欲的に活動していた。「今日も残量ゼロだといいな」とつぶやきながら調査に出かけたり、ポスターをつくるときには、「全校のみんなに見てほしい」と、校内で全学年が通る掲示板に掲示したりするなど、前向きに活動することができた。そして、校内放送で残量調査を呼びかけたりポスターを校内に掲示したりするたびに「きがヒーローだ！」と他の子どもに声をかけてもらい、とてもうれしそうだった。

【分別ゲームのてづくりのごみ箱】

分別マスターグループは、１・２年生に分別の仕方を知ってもらうために、「分別ゲーム」を行った。よりごみの分別を身近に感じてもらうことができるようにと、子どもたちはペットボトルやキャップ、お菓子の箱を配り、段ボールでつくったてづくりのごみ箱に分別してもらった。１年生の子どもが、どのようにごみを分別してよいのかわからず困っていると、「どこかにマークがあるよ」と分別のてがかりとなるマークに着目するように声をかける姿がみられた。また、てづくりのごみ箱には分別マークがついた看板を書いて分別がしやすいように工夫した。最後に、分別ができた学級にはてづくりのメダルを渡した。

【残量調査の様子】

発信活動を終えた後、各グループは学習支援アプリでアンケートを作成し、参加した学級に回答してもらった。回答結果が届くと「すごくよい結果になっていたよ！」とうれしそうに報告をした。



【助け合いチームのアンケート】

活動後の振り返りでは、「アンケートで伝わったと分かってよかった」「たくさん参加してくれてうれしかった」など達成感を味わう感想が多かった。また「今度は学区のみんなで学区全体のごみ拾いをしたい」「お母さんたちにも分別ゲームをやってもらいたい」など、次への課題が生まれている姿も多くみられた。

（３）第２次実践の成果○と課題●

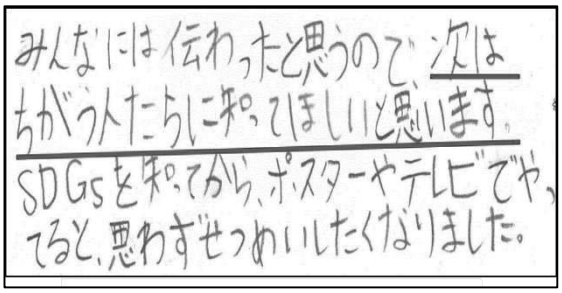
○　身近な専門家の考えにふれる機会を設けることで、SDGs がより身近になり「自分たちにもできることがある」と、自分の課題をより明確に設定する子どもがみられるようになった。

○　学習用タブレットの思考ツールを活用したことで整理・分析しやすくなり、互いの情報から必要な情報を精選することができた。そして、最後まで思いをもって発信活動を行うことができた。

○　参加者へのアンケート結果をもとに振り返ったことで、他者からの高評価によって達成感を味わうことができた。そして、アンケートをもとに「もっと広めたい」と次への課題が生まれ、探究心を高めることができた。

5　第２次実践後の子どもの変容

他学年からのアンケートで「SDGs についてわかった」「楽しかった」と高評価をもらった子どもたちは、「もっと広めたい」と次への課題が生まれはじめていた。「お家の人を呼んで、一緒に分別ゲームをしたい」という子どもの発言をきっかけに、家庭に SDGs の考えを広めるにはどうすればよいかという新たな課題が生まれた。第２次実践までの成果によって、子どもたちは活動の振り返りから次の課題を見つけ、思いをもって活動をすることができるようになった。それは、自ら課題を見つけ、自分事としてとりくもうとする姿だとわたくしは感じた。以下は、その後の子どもたちの活動である。


みんなには伝わったと思うので、次はちがう人たちに知ってほしいと思います。
SDGsを知ってから、ポスターやテレビでや、てると、思わずせつめいしたくなりました。

【第２次実践後の振り返りカード】

活動①　家庭の SDGs を探そう（課題の設定）

学級での話し合いの中で、「お風呂や水道の水がもったいないときがある」「電気をつけっぱなしにしている」「エコバッグを使ってもらいたい」「家でも食品ロスをなくしたい」など、すぐにたくさんの意見が出た。そこで、子どもは自分が伝えたい内容に合わせてそれぞれの課題を設定した。以下は、各グループが設定した課題である。

課題	発信活動（まとめ・表現）	チーム名
食品ロスをなくそう	プレゼンテーション	ストップ食品ロス
電気の節約	クイズ	電気を節約しよう
不平等をなくそう	紙芝居、プレゼンテーション	ジェンダーヒーロー
自然を守ろう	クイズ、プレゼンテーション	自然環境
健康の大切さ	プレゼンテーション	健康大切
生き物を大切にしよう	紙芝居、プレゼンテーション	いきもの大切
不平等をなくそう	クイズ	不平等ポリス
水の無駄をなくそう	実験動画	水は大切
プラスチックごみを減らそう	エコバッグ工作	エコバッグを使おう

【各グループの課題とその後のまとめの内容】

活動②　わたしたちにできることを集めよう（情報の収集）

同じような課題をもつ子どもどうしでグループをつくり、課題を達成するためにどんなことを家族に伝えるとよいかを考え、情報収集を行った。身近でできる活動については、子どもの学習用タブレット端末の中にある、SDGs を学ぶことができるアプリやインターネット、図書室の本などを使って情報収集を行った。どのグループも伝えたい思いや課題が明確になっており、自分たちで相談しながら意欲的に情報収集をしていた。

活動③　SDGs の考えを家庭へ広めよう（情報の整理・分析）

各グループは集めた情報をもとに、課題を解決するために何ができるかを学習支援アプリの思考ツールを使って話し合うことにした。家族に伝えるために、プレゼンテーション資料にまとめて、発表会を行うことにした。子どもたちは、「家庭で実践できるもの」という観点で情報を精選していった。情報を整理・分析していくうちに、「せっかくだから、家庭ですぐにやってみようと思ってほしい」「おとなむけだから、温暖化みたいに少し難しくても伝わるね」など、相手を意識して考えたり思いをもったりして話し合いをすすめることができた。

活動④　SDGs 発表会をしよう（まとめ・表現）

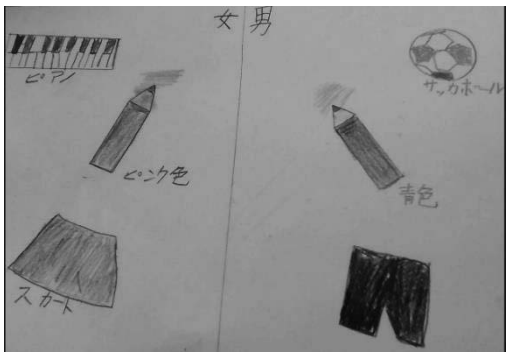
活動③で選んだ情報を、学習支援アプリを使ってプレゼンテーション資料にまとめ、グループごとに発表した。

「プラスチックごみを減らそう」というテーマを選んだグループは、新聞紙でつくるエコバッグのつくり方を、実際に作っている動画にまとめて発表した。

【水の無駄を示す動画】

「水の無駄をなくそう」というテーマを選んだグループは、蛇口の水を出しっぱなしにして手を洗ったときと、石鹸を使っている間は、水を止めて手を洗ったときの動画をつくった。その際、それぞれ水そうに溜まった水の量の違いがわかるように発表した。そして、「出しっぱなしにすると、こんなに水がもったいないです。みなさんも無駄遣いはしないように気をつけましょう。」と節水を呼びかけた。

「不平等をなくそう」というテーマを選んだグループは、SDGs のジェンダーレスの考え方にふれて発表した。色、服装やスポーツなどについて、「男の子だから、女の子だからなど、性別の考え方をなくしましょう」と、紙芝居にわかりやすくまとめて発表することができた。



【平等を呼びかける紙芝居】

以上のように、子どもたちは自ら課題を見つけ、情報を集め、話し合う活動を通して、自分事としてとりくもうとする姿を見せた。

6　研究のまとめ

実践がすすむにつれて、子どもたちは自ら課題を発見し、互いの考えを伝え合うようになった。その課題解決にむけて夢中になって活動する姿は、SDGs を自分事としてとらえ、行動する姿であった。これはまさに、わたくしがめざす子どもの姿であると感じた。

「一人から周りへ。一人の考えを周りにつなげることで、SDGs の考えが広がる。今のぼくたちがそうだと思います。」話し合いで出た子どもの言葉が、とても印象に残っている。一人の子どもの質問から SDGs を知り、学級の子どもに伝え、学校全体、そして「今度はお母さんにも知ってほしい」と、家庭にも広がっていこうとしている。

発信活動として、ごみ拾いゲームをしたとき、「この間もごみ拾いをしていたね」と地域の方から声をかけられた。学級の子どもが、いつも遊んでいる公園のごみ拾いを自主的にしていたのである。また、委員会活動では、「環境委員会でもごみ拾いゲームをやろう！」「今度は給食委員会で残量調査をするよ！」など、さまざまな報告を子どもから受けた。

実践を終えて、子どもたちは、学級はもちろん、委員会活動や日常生活など、学級の枠を越えて活動をしようとする姿がみられるようになっていった。

わたくしは、今後も子どもたちの思いや願いに寄り添いながら、さまざまな活動を、自分事としてとらえて行動できる子どもを育てていけるよう、実践をすすめていきたい。